

琉球新報と上原正稔の間に何があったのか

ぼくは二〇〇六年四月四日から十二月二十八日まで、琉球新報で『戦争を生き残った者の記録』を147回にわたり連載し、二〇〇七年五月二十六日から二〇〇八年八月十九日まで『パンドラの箱を開ける時』を長期連載した。だが、『パンドラの箱…』の百八十一回目の最終原稿が発表されず、「おわり」の記述がないまま、尻切れトンボで終わった。何があったのか。

二〇〇八年七月下旬、ぼくの連載を担当していた記者が「編集部の方からパンドラの連載をそろそろ終わってくれないかと言ってきた。」と伝えた。ほかの連載が予定されているからだそうだ。ぼくは、いよいよ来たか、と思った。ほかの連載が予定されている、というのは嘘だ、と知っていた。だが、ぼくは「それじゃ、八月一杯で終わろうな」とあっさり言った。そこで、『[最終章—そして人生は続く](#)』を短くまとめることにした。最終章四回目にぼくは一フィート運動の醜い内幕を暴露する原稿をいつものようにeメールで送った。ところが、担当記者から電話があり、社長も交えて編集会議が開かれ、書き換えるよう注文してきた。そこで、ぼくはやむなく折れ、差し障りのない話にまとめた。最後の原稿に支障が出ないように配慮したのだ。最後の五回目にぼくは赤松嘉次さんと梅澤裕さんについて次のように短くまとめ、原稿を出した。その全文を紹介しよう。

—ぼくは一九九六年六月一日から、琉球新報文化欄でグレン・シアレスさんの手記「[沖縄戦ショウダウン](#)」十三回シリーズを発表した。その中で渡嘉敷の集団自決の真相を発表した。その物語を発表する前年の九五年に、ぼくは二度渡嘉敷を訪れ、裏付け調査をした。その調査の過程で、大城良平さんと金城武徳さんは、「集団自決」について驚くべき真相を語ってくれた。二人は「赤松嘉次さんは自決命令を出していない。それどころか、集団自決を止めようとしたのだ。少ない軍の食料も住民に分けてくれた立派な人物だ。村の人たちで赤松さんを悪く言う者は、一人もいないはずだ。みんな感謝している。」と言うのだ。感謝しているとはどういうことなのか。ちょうど、その頃だった。九五年六月二十二日、二十三日、二十四日の沖縄タイムスの文芸欄に宮城晴美さんが「[母の遺言—切り取られた“自決命令”](#)」を発表した。凄まじい衝撃波が沖縄を駆けめぐった。曾野綾子さんの『ある神話の背景』を読んでも共感できなかったが、今、全てがはっきり見えてきた。座間味村女子青年団長だった晴美さんの母初枝さんは、戦後、その著作物で「住民は男女を問わず、軍の戦闘に協力し、老人、子供は村の忠魂碑の前に集合し、玉砕すべし、と梅澤隊長から命令が出された」と記していたが、その部分は“嘘”だった、と晴美さんがコラムで発表したのだ。「母はどうして座間味の“集団自決”が隊長の命令だ、と書かなければならなかったのか」晴美さんはいきさつを説明した。

一九四五年三月二十五日。その夜、初枝さんは、島の有力者四人と共に、梅澤隊長に面会した。意味もわからぬまま、四人に従っていった。有力者の一人が梅澤隊長に申し入れたことは「もはや、最後の時がきた。若者たちは軍に協力させ、老人子供たちは軍の足手まといにならぬよう忠魂碑の前で玉砕させた

い」というものだった。初枝さんは息も詰まらんばかりのショックを受けた。だが、隊長は“玉砕の申し入れ”を断り、五人はそのまま壕に引き返した。

戦後、沖縄に援護法が適用されることになったが、援護法は本来、軍人、軍属に適用されるもので、一般住民には適用されないものだ。そこで、村当局は「隊長の命令で自決が行われており、亡くなった人は「戦闘協力者」として遺族に年金を支払うべきだ、と主張したのだ。

「そうか、そうだったのか。」全て、納得がいった。

二〇〇六年一月二十七日産経新聞は琉球政府援護課で援護業務に携わっていた照屋昇雄さんに取材、報道した。照屋さんは「軍による命令ということにし、自分たちで書類を作った。当時、軍命令とする住民は一人もいなかった。」と証言した。さらに照屋さんは「うそをつき通してきたが、もう真実を話さなければならぬ、と思った。赤松隊長の悪口を書かれるたびに、心が張り裂ける思いだった」と語った。

最後に、ぼくが大切に保存していた二通の手紙を紹介しよう。それは一九七〇年三月下旬、「赤松帰れ」「人殺し帰れ」と激しい攻撃に晒された赤松嘉次さんが数日後、比嘉喜順さんに宛てた手紙だ。一九七〇年四月二日付の手紙は言う。「(前略) 村の戦史については軍事補償其の他の関係からあの通りになったと推察致し、出来るだけ触れたくなかつたのですが、あのような結果となり、人々から弁解の様にとられたことと存じます。何時か正しい歴史と私たちの善意が通じることと信じております。(後略)」同じく四月十七日の手紙は言う。「先日元琉球新報の記者より手記を書いてくれ、と言われましたが、一度世に出しこれ程流布されてからでは難しいだろうから、新に真実のものは出したらどうかと言っておきました。何れにしても私たちは真相が明白にされ、私たちの汚名が拭き去られる日を期待して努力しております。一日も早く沖縄の人々にも理解して頂き、私たちと島民が心を合わせて共に戦ったように次の世代が憎しみ合うことなく本土の人々と仲よくやっけてゆけることを祈ってやみません。」

これで、パンドラの箱を閉じる。パンドラの箱に残ったもの、それは人間の真実だ。

(おわり) -

今度も編集部は書き換えを注文してきた。だが、ぼくの腹は決まっていた。これで終わりだ、書き換えることは絶対ない、と通告した。まさか、最終原稿をボツにすることはありえない、とぼくは踏んでいた。ところが、編集部はぼくの友人であった高嶺朝一新社長を入れて鳩首会談を開き、最後の原稿はボツにすることになった。こんなわけで読者がこの原稿を目にすることもなく、「おわり」を告げるぼくの声を聞くこともなかった。前代未聞のできごとだった。

こうした人間の行為や事件には必ず理由がある。そもそも、ぼくが今回の琉球新報の連載をするようになった裏にはK(元)編集局長との長年の交友関係があった。ここでは詳しいことは省くが、二〇〇六年一月にKから新報で沖縄戦を連載してくれないか、との話

があり、ぼくは気軽に承諾した。朝刊の紙面に余裕はないが、夕刊に局長権限でスペースを作ることになり、週五回（火曜から土曜）連載することになった。その数年前からぼくは暇を見つけては公文書館や資料編集室を訪ね、膨大な沖縄戦資料に目を通していった。10年間、連載を続けても消化しきれない量だ。膨大なアメリカ軍の資料を処理できるのはぼくだけだ、という自負があった。Kはそのことをよく知っていた。だから連載をぼくに頼んできたのだ。こうして、長期連載が始まった。そしてKは池間編集員をぼくの担当記者に指名した。担当記者というのは、ぼくのeメールを受け取り、整理して新聞に発表する役割で、それ以上でもなくそれ以下でもない。ぼくはそれまで数々の連載をこなし、担当記者とはうまく折り合いをつけ、仲良くやってきた。池間記者とも冗談を言い合う仲となった。連載のタイトルと内容も全部ぼくに任せられ、ぼくは自由に書くことができた。ぼくは過去に発表されたものにも、新しい資料と解釈を加え、読者があつと驚く物語を伝えた。「戦争を生き残った者の記録」と題された物語は順調に進み、十二月に入って、Kから話が来た。特集コラムを用意しているが、紙面がないのでしばらくぼくの欄を空けてくれないか、と申し訳なさそうに言った。ぼくは「ああいよいよ。ぼくにも休みが必要だからね」と気安く応じた。「戦争を生き残った者の記録」というタイトルにもぼく自身飽きていたから第12話「井戸の底から生還したウチナーンチュ」をその年の最終発行日十二月二十八日でピタリと終え、読者に休みを告げた。その後、次の連載の準備で公文書館に通い、タイトルもぼくがアメリカ公文書館からフィルムを入手し、二〇〇五年に製作し、発表した映画『パンドラの箱を開ける時』を使用することにし、編集局長にも池間記者にも告げ、必要な情報を与え、準備させた。ところが二〇〇七年四月池間記者は人事で社長室長に任命され、K編集局長は特集コラムの連載が終わる五月中旬に入って後任に前泊博盛記者を指名してきた。前泊は連載の担当記者の経験が少なく、ぼくの数々の連載を読んでおらず、自分の記事だけを読んで満足している記者だった。実はこうした記者が多いことを読者は全く知らない。彼は初めから横柄で、50回から70回の物語だと思いついでいた。ぼくが『パンドラの箱』の物語は200回ぐらいになりそうだ、と言うと、首をかしげていた。彼が編集局長とどのような話をしたか、知らないが、それで進むことになった。実は回数は問題ではなく、ぼくが必要なら続けられればよいことで、もしKが止めてくれと言えればいつでも止めるつもりだった。だがそんなことはKの頭にはなかった。それ以上の話はなかったが、前泊はこれまでの担当記者とは違い、一週間前に原稿を出すように指示したり、『パンドラの箱』のレジメを出してくれ、と指示したり、原資料を出すように指示したり、無知で横柄な性格を丸出しにしてぼくにとっては不快な担当記者だった。だが、ぼくはそれに応じて「まえがき」で詳しくレジメを書き、読者に伝えることにした。

二〇〇七年五月二六日から始まった「パンドラ…」の物語の冒頭で、ぼくは次のように予告した。「第二話 慶良間で何が起きたのか」は今、世間の注目を浴びている「集団自決」についてアメリカ兵の目撃者や事件の主人公たちの知られざる証言を基に事件の核心を突くものになるだろう。」ぼくは多くの読者がぼくの物語に注目していることを知っていた。その頃、琉球新報も沖縄タイムスも「大江・岩波」訴訟すなわち「赤松、梅澤二人の戦隊長は集団自決を命じていない」として出された名誉毀損の裁判と教科書から軍命が消された事件で大江、岩波を支持し、集団自決に軍命があったと教科書に書くべきだと大キャンペーン

ンを張り、連日のように社説、コラム、記事で報道していた。そんなわけで、ぼくが予告した物語がどのようなものになるか、多くの読者、特に本土の新聞記者やインターネットのコラムニストたちが息を詰めて見守っていた。そんな中でもぼくは何の不安もなかった。ぼくは既に一九九六年六月に『[沖縄戦ショウダウン](#)』の長い「注」で、赤松、梅澤が集団自決を命じていないことを発表し、大好評を博し、新報からも「よくやったな」と評価されるという実績があったからだ。今回はこの「注」を拡大して詳細に集団自決が始まってから八月下旬に投降するまでの壮大な物語になるはずだった。前半は『[沖縄戦ショウダウン](#)』を必要とし、後半は「第三戦隊陣中日誌」を必要としていた。だが、第二話が発表されることはなかった。ぼくの物語はその後、四ヶ月間中断した。一体何があったのか。ぼくの連載の新担当者となっていた前泊博盛記者には『[沖縄戦ショウダウン](#)』、『第三戦隊陣中日誌』など数多くの原資料と一週間分の原稿を渡していた。その時、前泊はこれはおもしろそうだな、と嬉しそうに言った。そして彼は週末には東京に行くと言った。六月十五日のことだった。ところが、六月十八日の月曜日、東京から戻った前泊から新報社に来てくれ、と連絡が入った。六月十九日から始まることになっていた『慶良間で何が起きたのか』のことかとぼくは思ったが、あの“リンチ”事件が起きるとは夢想もしていなかった。新報社に着くと、前泊はヤケに威張った調子で、ぼくを編集部の上の階の空き部屋へ連行した。そこには顔見知りの編集記者三人が難しい顔をしてぼくを待っていた。前泊はいきなり言った。「第2話は載せないことにした。」「何だと！ どういうことだ。」ぼくは怒鳴った。前泊が東京で誰かに入れ知恵されていることは明らかだった。記者の一人が「新報の編集方針に反するからだ。」と冷ややかに言った。別の記者は「君は何年か前に同じ記事を書いているじゃないか。重複は許さん。」ぼくは言った。「それは君らの屁理屈だ。僕は第1話の伊江島戦でも日本側とアメリカ側の両方の資料を使っている。その一つは既に新報で発表している『[沖縄戦ショウダウン](#)』を使ったぞ。第2話も『[沖縄戦ショウダウン](#)』や多くの資料を使って4、50回の長編にして赤松、梅澤の名誉を回復するものにするつもりだったのだ。その資料は前泊にも渡している。彼は喜んでいただぞ。」だが、四人組はできんものはできんの一点張りでも前に進まない。ぼくは言った。「君たちにはぼくの連載にストップをかける権利があるのか。表現の自由の権利を侵しているんだぞ。ぼくは記者会見でこれを発表する。」一人の記者（現編集局長波名城）があわてて「記者会見はやめてくれ」と言った。話は決裂した。「編集長もこれを知っているのか」と訊くと、前泊は「ああ、了解している」と答えた。K編集局長は新報社内でもぼくを高く評価している唯一の友人だ。実際、社内報でもぼくの沖縄戦に対する姿勢を強く支持してくれた。ぼくは戦争を人間が試される究極の舞台としてとらえ、その中で沖縄の人々が見事に戦争を生き残り、老人たちの姿は聖衆（シジ）高く（巖かで）、子供たちの笑顔は純真であったことを伝えてきた。Kはそこに共感を示していた。彼とはウチナー口で話し合う仲だ。Kはよく「君には数年書いてもらおうぞ。タイムスに取られては困るからな」と言う仲だった。Kに確認をとるため、編集部に戻ったぼくは、前泊に言った。「このままではパンドラの箱を中止するぞ」 ぼくには自信があった。読者は皆、ぼくの味方だ。だが、前泊は「ああ、構わんよ」と尊大に言った。ぼくは「そうか、そう言うなら、明日にでも記者会見を開くぞ」と最後通告を送った。彼は「ああ、どうぞ」とぼくを見下すようにニヤッと笑った。醜い笑いだった。その場面を女性記者問山が目撃していた。前泊はK編集局長の指

名でぼくの連載記事の担当役すなわち、ぼくのeメール原稿を受け取り、整理するだけで、ほかに役目はないが、まるで検閲官のように威張りくさっている。ぼくは本当に腹を立てていた。そしてK編集局長に抗議した。翌日ぼくは又も前泊に呼び出され、前日と同じ部屋で同じ顔ぶれの四人組の前に座らされた。だが、この日の四人は妙にオドオドしていた。編集局長から四人組とぼくの話が対立しているので、テープを取るように指示されていたとのことだった。ぼくは自分のこれまでの仕事や、赤松さん梅澤さんが集団自決を命令していないことを完全に証明するつもりであることを告げた。彼らはただ黙って聞いていた。だが、ぼくが記者会見を開くことはなかった。ぼくはぼくと四人組の間で悩んでいるK編集局長の立場を尊重することにした。四ヵ月後、連載は再スタートし、前泊はぼくの担当を外され、社会部長が担当することになった。それが唯一の救いだったが、第2話はカットされ、ぼくの気が晴れるはずもない。二〇〇八年にはKは編集局長の座を下り、ぼくを理解する記者はいなくなり、冒頭で述べたように、ぼくは、新報と決裂することになったのだ。ここでぼくがKと記している理由はただひとつ、ぼくはKを今も友人だと信じ、Kに恥をかかせたくないからだ。

三年間の連載をケンカ別れに終えて間もなく、『うらそえ文藝』誌の星雅彦編集長から連絡が入り、会うことにした。彼の雑誌で「集団自決」の真相について対談したい、と言うのだ。彼はぼくと新報の“喧嘩”を耳にしていた。ぼくは星さんの顔を知っていたが、話したことはなかった。彼も長い間、“鉄の暴風”が間違いだらけであることを知っていて、ぼくの「パンドラの箱」が中断した後に、琉球新報に“鉄の暴風”について小論を出したところ、編集方針に反する、ということで不採用になった、ということだ。そして、最近、彼が長年担当してきた新報の美術評論も外された、ということだ。新報の担当者に理由を聞くと、「星さんの文章は難しいからだ」とすぐバレル嘘を言った、というのだ。実は沖縄人にはこうした小さな嘘を平気でつくという習性があるのは確かだ。ぼくはこうして、『うらそえ文藝』で「人間の尊厳を取り戻す時、一誰も語れない“集団自殺”の真実」を発表した。そして、同時に「集団自決をめぐって」と題する星さんとの対談の中で、沖縄タイムスと琉球新報を痛烈に批判した。ぼくの愛読者には申し訳ないが、ぼくが再び、両紙で連載することはないだろう。ぼくは既にルビコン川を渡ってしまったのだ。ぼくは琉球新報を2011年1月31日那覇地裁に訴え、ロングセラー『鉄の暴風』で『赤松、梅澤は集団自決を命令した極悪人だ』と臆面もなく無知な読者をだまし続けている元凶の沖縄タイムスをどう“始末”するか、模索中である。ぼくはこれからも赤松さんと梅澤さんの名誉を回復することに全力をかけて戦いを続けていくだろう。それが沖縄の子どもたち、そして子孫たちに真の誇りを伝えていくことにつながるからだ。今、ぼくは人間の尊厳をかけた「戦争」の真っ只中にいる。